

1-6					
主題	従来型施設のスペースの活用と介護士の業務負担改善				
副題	利用者の朝の活動を増やし生き生きとした生活環境を提供する				
キーワード 1	利用者の分散	キーワード 2	介護士の業務改善	研究(実践)期間	23ヶ月

法人名・事業所名	社福) 康和会 特別養護老人ホーム 久我山園
発表者(職種)	伊藤友見(介護職員)
共同研究(実践)者	親泊ありみ(介護職員)、大西幸(介護職員)

電話	03-3309-3211	FAX	03-3326-6054
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	1982 年に開設され定員 70 名、ショートステイ 2 名からなる従来型の特別養護老人ホームです。また利用者の方一人一人が尊重され喜びに満ちた生活が送れるよう支援しています。同敷地内には急性期病院・老健が併設され多職種・多施設が連携を取り地域福祉を根ざしています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成 26 年 8 月～平成 27 年 6 月に当施設は全面改築を実施、改築後は 1 階、2 階、3 階に各 3 か所の広いトイレが確保され利用者の排泄介助の導線もスムーズになった。しかし、長年の習慣から 1 階食堂で食事摂取後は利用者を各フロアーに戻しトイレ誘導を行っていた。職員も利用者のトイレ誘導の業務に追われ、利用者も暇を持て余すなかトイレ通いが多く見られていた。

平成 29 年度に理学療法士が入職し、週 2 回集団リハビリを実施することになった。

そこで、リハビリ開始までの時間と午前中のリハビリ終了までの時間を利用者にメリハリのある生活の提供を朝の活動(以降朝活という)として導入し、職員にとっては業務負担の改善を目指すことにした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

改築後使用しやすくなったトイレの活用で、利用者の生活改善と職員の業務負担改善が出来るのではないかと以下の仮説を立て取り組んだ。

- 1、1 階を含む各フロアーで排泄介助を行う事で、利用者のトイレを待つ順番が短縮される。
- 2、介護士も各フロアーに分かれて対応するため今までの排泄介助が減少し次の業務に移行しやすくなる。
- 3、リハビリまでの間、利用者は食堂で手作業をしながら目的のある生活が出来る。
- 4、集団リハビリを行う事で、運動機能の向上または後退を防止する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- 1、朝活は利用者・介護職員に混乱が無いよう 2 回/週の実施とした。
- 2、業務整理：1 階食堂利用者の見守りを事務職員から介護職員に移行した。
- 3、業務改善委員会を設置し、業務改善時各職員の意見を聞きそれらを総括できる管轄を設けた。

4、利用者の選択：自己摂取可能な利用者に加え、介助摂取利用者も食堂利用を可能とした。

5、朝活の内容：嗜好品の提供、手作業、音楽鑑賞、1階トイレの活用、集団リハビリ

6、1階対応介護士への業務での不安点、改善点に対するアンケート実施約2回

《4. 取り組みの結果》

1階トイレを使用することで、フロアーのトイレ待ちの利用者が減少し待ち時間が短縮された。フロアー介護士のトイレ介助の業務時間が15～20分短縮された。利用者一人一人と接する時間が増えた。以前は利用者がテレビ前に密集しているような状態だったが、利用者が分散されることでスペースも増え、フロアーでも集団でボール渡しや個別の趣味に付き合うことが出来た。

午前中はフロアーでなんとなく時間を過ごしていた利用者が朝活をすることで、傾眠だった時間を覚醒している時間に変えることが出来た。また、手作業や音楽鑑賞により集中した時間を持てたことがトイレ通いを解消し、1回の尿量を増やすことが出来た。

職員のアンケートの回収率は75%だった。朝活が始まって困ったことがあったと29%の職員は答えている。対応困難の内容は100%が1階の対応利用者の把握や職員間の連携不足で混乱し時間を要したと答えている。次に朝活が始まって業務の負担は減ったかの問いには、96%の職員が「はい」と答えている。重複回答ではあるが、やはり排泄介助が一番多く64%、次いで嗜好品提供者が減った54%だった。

朝活を始めて良かったかの問いには100%の職員が「良かった」と答えている。朝活を始めて利用者に変化はあったかの問いには「リハビリ内で対抗心や競争心、協調性など個々の様子が見えて発言などに変化がみられる」「利用者がよく笑うようになった」などの意見が聞かれた。

週2回の朝活をもっと積極的に増やした方が良いかの問いには83%が「はい」と答えているが8%が「いいえ」と答えている。理由は人員問題や利用者の出席率減少を懸念していた。

《5. 考察、まとめ》

今回、朝活を導入して一番良かったことは、利用者の生活にメリハリが付き「楽しい」や「体を動かしてよかった」といった言葉が聞かれたことである。トイレに固執していた利用者も集中している時間が出来ることで、気持ちを切り替えることが出来たと考える。利用者の笑顔が増え、職員も落ち着いて介護が出来るようになった。また、フロアーにいる利用者の見守りがゆとりを持ってできるようになったのも、業務改善により業務内容が分散された結果だと考える。

今後の展望として、朝活に参加していない利用者に対し、利用者の個別性を活かした活動内容を検討し、安全と安心を提供できるよう努めたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「介護保険事業所 業務改善ハンドブック～選ばれる施設になるためのハンドブック99～」
(2012) 中央法規出版 P36、P60、P152

「完全図解 介護予防リハビリ体操大全集」(2010) 大田仁史著 講談社

《8. 提案と発信》

利用者の生活を支援している介護士の行動により、生活のメリハリや生きがい感を見出すことが出来る。そのような活動を今後も積極的に実施したい。